H30 年度　児童福祉部　事業報告

目次

はじめに	1
1．地域との繋がり	1
2．保育状況	2～3
3．課題の振り返り①教育保育内容の充実	3～4
課題の振り返り②支援保育研究・研修（モモ）	5～6
課題の振り返り③危機管理	6～9
課題の振り返り④人材確保・育成	9
4．苦情要望	9
5．子育て支援事業	10
6．研修	11～14

平成 30 年度　児童福祉部　事業報告書

はじめに

　プロジェクト（課題への取り組み）が立ち上がる動機は、そこに問題があると気付いたところから始まります。自分で発見し、何をすべきか考え、必要な事柄を知り、取り組む。それは、幼児期教育でＨ３０年度から全面実施となった学習指導要領の改訂のポイントである「主体的・対話的深い学び」つまりどのように学ぶか、プロセスを大切にする子どもの学びと同様です。子どもの良き手本であるべき大人たちが実践できているのか？そもそも主体的に生きようと自覚しながら生活をおくっているのか？そのような問いをもち、また迷ったら動機に戻ることを意識しました。H29 年度は保育の質の維持及び向上では一年を通し「生活を豊かに」をテーマに、豊かさとは何かを職員間で議論し、保育内容や環境設定の見直しを行いましたが、H30 年度は保育の質を３つの視点別に取り組みました。

１、「保育の質・実践の質　保育のプロセスが成長にとって適切であるか。保育者の専門性等」
　２０１９年はこどもの権利条約の採択 30 年、日本批准が２５年の節目の年です。園内研修の根底には常に『子どもの権利』を意識した内容で取り組みました。
２、「構造の質・子どもの集団の大きさ、空間、遊具、素材、保育者の研修等」
　専門性を高める研修参加、公開保育による、他者からの観察・評価と省察の確保。
３、「労働環境の質・研修、休憩、適切な労働時間と休み」
　H30 年度から産業医による各事業所のラウンドにより、職場環境の見直しもスタートしました。取り組みの詳細は右項からの報告に記します。

知らない事を知ることは、おもしろいし嬉しい。
出来ることが増えていくのも、おもしろいし嬉しい。
知識からでた言葉より自分の体験から出た言葉は、人の心に響く。
自分をつくり上げていく葛藤を乗り越えていけるのは、こんな気持ちがあるからだと子どもの姿をみて思います。心が動いて得た知識や技術は一生の宝物です。子ども達の宝物がより輝くよう努めてまいります。

１．地域との繋がり

　昨年度は、蒼生会創立 20 周年により、法人の行事「カシオペア祭」を記念行事として高齢施設と共に進めた。当日は天候不良にもかかわらず、地域や近隣の学校関係者も含めて多くの参加者が来場し、大盛況となった。
　今後も地域の福祉ニーズを調査しながら、それに応えていく運営ができるよう関係を築いていきたい。

日枝神社のお祭り参加

創立 20 周年記念「カシオペア祭」

2. 保育状況　各園

入所実績(4 月・3 月)　　単位：人

4月	認定こども園モモ	認定こども園ピノ	保育園ナナ
	在籍／定員	在籍／定員	在籍／定員
	93 名／１００名	77／80 名	１７名／１９名
内訳３号	33 名／　34 名	35 名／　38 名	１７名／１９名
２号	55 名／　６０名	42 名／　42 名	
１号	５名／　　６名		
3月	認定こども園モモ	認定こども園ピノ	保育園ナナ
	95 名／１００名	80 名／　80 名	１９名／１９名
内訳３号	35 名／　34 名	38 名／　38 名	１９名／１９名
２号	54 名／　６０名	42 名／　42 名	
１号	６名／　　６名		

一時預かり事業　（モモ）

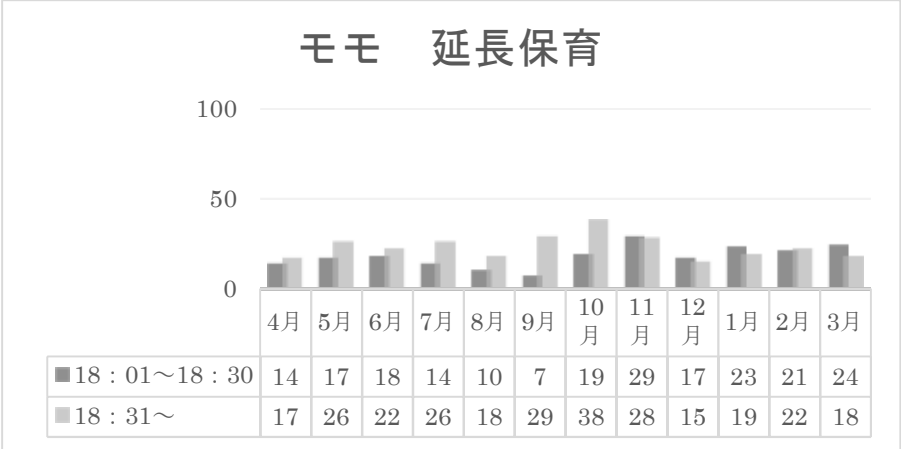
特定保育の問い合わせでは入所の相談が多く、結果一時保育の受け入れ実績にはつながらなかった。他の利用理由は就労面談や通院が多かった。利用受付時には、乳幼児突然死症候群（SIDS）が初めての預け先、慣らしでの保育等にリスクが高いことを踏まえ、利用希望日よりも前に１～２時間の短時間利用を勧めるなどして母子ともに安心して預けられるよう対応した。

一時預かり事業　（ナナ）

定員に達する７月まで、２名の受け入れがあった。

延長保育事業　　（モモ）

延べ利用数　491 人/前年度　1,649 人



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
18：01～18：30	14	17	18	14	10	7	19	29	17	23	21	24
18：31～	17	26	22	26	18	29	38	28	15	19	22	18

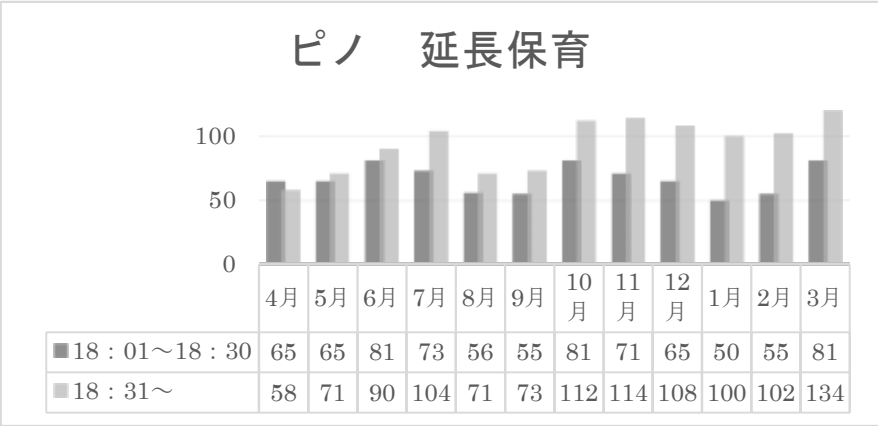
延長保育事業　（ナナ）

延べ利用数　７人/前年度　75 人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
18：01～18：30	0	0	0	0	2	0	1	0	2	0	0	0
18：31～	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0

延長保育事業　　（ピノ）

延べ利用数　1,935 人/前年度　1,798 人



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
■18：01～18：30	65	65	81	73	56	55	81	71	65	50	55	81
■18：31～	58	71	90	104	71	73	112	114	108	100	102	134

ピノはこれまでの延長保育の利用状況を基に、H30 年度より延長保育時間を 19 時までに短縮した。継続利用者への経過措置として、H30 年度中は、緊急時に 19 時を過ぎた場合も従来の延長保育料と同額で利用できる措置を講じた結果、対象となる一世帯が年間 6 回 19 時過ぎる利用があった。他は 19 時超過となる利用が年間計 17 回、一日の平均利用者数は 8～9 名ほどで推移している。最大 15 名利用する日もあり、引き続き延長保育のニーズに対応していく。

園児健康管理（3 園共通）

●内科健診　0 歳児毎月 1 歳児年 4 回　2～5 歳児：年 2 回
●歯科健診　　年 2 回（4 月・10月）
●尿検査　　年 1 回（6 月）
●身体測定　【身長・体重】0 歳児毎月実施　1 歳児年 4 回実施
2 歳児～5 歳児年 2 回　　【頭囲・胸囲】　全園児：年 2 回

※相模原市には「保育園における健康診断マニュアル」があり、マニュアルに則り、より園医との連携を図り、子どもの健康・発達促進に努めることができた。

3．課題の振り返り

①教育保育内容の充実

●テーマ「きく」

教育保育の実施内容では、子どもや保護者、地域の声をきくこと、声に出さない心の声、子どもの姿や態度からの読み取りが不十分であったという課題をもって取り組んだ。子どもの成長を、カシオペア祭では保育者や地域、保育士養成校の学生にも伝わるように展示や掲示で可視化したり、音楽の演奏や体験コーナーを設けるなど３園で協同し、園生活の中での学びや育ちが伝わるよう工夫をした。

日々の子どもたちの様子は保育アプリ「キッズリー」で配信し、写真と文章で構成されているため、保護者に教育保育内容を伝えるツールとして定着している。ネット環境が身近にない家庭への伝える手段としては、配信したものを掲示して補っている。登降園時に掲示物を介し保護者と子どもとの会話が増えていることも、子育て支援、教育保育内容を理解してもらえる機会となっている。

● 平成 30 年度より、幼保連携型認定こども園教育・保育要領・保育所保育指針改定

改定にともない、「全体的な計画」の見直しと、3 園合同で研修を実施。変更点や追記事項を確認し、更なる知識を習得する機会となり、保育の質の向上に繋がっている。

また、園ごとに、実践している保育内容を展示・掲示・体験で示した。

●保育カンファレンス、PDCA サイクルの実践による教育・保育の質の向上

27 年度の保育の可視化から続く発達評価表の使用を行った。発達評価表は子どもの発達をみていく際に、年齢ごとに個々の子どもの様子を把握できたが、評価基準が出来る、出来ないに偏ってしまう傾向も生じた。H30 年度施行の「認定こども園教育保育要領」「保育所保育指針」による「子どもの育ち」の捉え方と逆行してしまう傾向になり、再度見直しをし、再構築を図った。

成長記録および指導要録作成システムである「コモシル」を年長児のみ導入し、子どもの育つ姿を要領にある「幼児期にのばしたい１０の姿」から捉え、文章だけでなく写真を添付することで育ちを可視化して表現した。さらに、成長記録（3 歳児～５歳児）は保護者に渡したあと、保護者からのコメントを記入してもらうことで、保護者の気持ちや思いを感じるだけでなく園側の大きな励みにもなった。

成長記録の可視化と共に保護者のコメントを取り入れたことで、教育保育内容を保護者にどう理解してもらうか、育ちを共有できるかどうかという点に対し、わが子の成長を喜ぶコメントが寄せられることが増え、日々の生活の中でプロセスを大事にしていることなどが伝わり、理解が深まっていると実感できるものとなった。

●年間行事予定

月	園内行事	保護者参加行事
4	入園の集い、進級のお祝い、進級お祝い、コンサート、春のおまつり、歯科健診・内科健診、安全教室（ピノ幼児）	入園の集い
5	端午の節句、さつまいもの苗植え	災害時伝達訓練、 乳児懇談会、幼児遠足
6	じゃがいもパーティー	幼児懇談会
7	夏のおまつり（幼児）、プール開き	
8	プール遊び　プール納め	
9	カシオペア祭・教育保育展	引き取り訓練
１０	運動遊び（幼児）、歯科健診・内科健診 交通安全教室（モモ）	運動遊び（幼児）
１１	秋のおまつり、防犯教室（ピノ幼児）、 りんごの庭かんな遠足・ひなぎく遠足	保育ウィーク
１２	冬のおまつり・お楽しみ会（幼児）	
1	鏡開き	懇談会・防犯教室 （5 歳児モモ）
2	豆まき、ひなぎく遠足	懇談会、卒園遠足（5 歳児）
3	ひなまつり、ひなぎくパーティー 卒園児を送る会	卒園式、 ひなぎくパーティー
備考	・誕生会は一人ひとりの誕生日に実施 ・毎月避難訓練（消火訓練）実施	誕生会（幼児）

●登降園管理システムの導入(モモ・ピノ対象)

業務の見直し、効率化の検討の中で保育アプリ「キッズリー」と連動する「登降園管理」システムを導入した。これにより登降園時に保護者がスマホを持ち「キッズリー」の画面から打刻ボタンを操作することで時刻が表示されるようになった。

行政から有資格者が子どもの人数に対して時間ごとに正しく配置されているかを問われる中で、アナログな手法では対応しきれないために導入に至ったが、登降園時刻を打刻するシステムは延長保育料金、１ 号認定の預かり保育料金にも反映できるため、事務業務の効率へと繋がっている。

②支援保育研究・研修(モモ)

指定園としての研究・研修を２回実施。

第１回目は支援保育コーディネーターが講師となり、「気になる子との関わり」と題して、各園で気になる子どもの発達を促せる感覚運動遊びを考える研修を行った。事例を出し合い、その事例にあった遊びをグループごとに考えて発表することで、各園にある身近な遊具、玩具を使って子どもと関われる遊びがあり、発達が促せることやその子の困り感を軽減できる可能性を参加者たちが実感でき、自園に持ち帰って実行に移せることの発信ができた。どの園にも支援が必要な園児がいるものの、どのように関わったらよいのか迷っているままでいるケースが多く、グループワークを通じてコーディネーター同士が困り感を共有できたことも開催の目的達成を実感できる機会となった。

第１回市内コーディネーター研修の様子

また、園内の取り組みとして感覚につまずきのある子どもの姿を客観的にとらえるために、相模女子大学教授が作成した発達チェックリスト「チェディー」を活用し幼児クラス全員分の発達を確認したところ、支援が必要として捉えていた園児と合致した。今後、チェックリストを別の職員が付け直し、同じ結果となるのかを試みる。そして、子どもの発達段階を見ていく際にどの部分の弱さがこの結果につながるのかという研究につなげたい。

第２回市内コーディネーター研修　「親との関係を築く
～親の気持ちによりそいながら～」

第 ２ 回の研修テーマは和光大学、和泉短大等で講師をされている辻先生と、過去にとった支援コーディネーター研修後のアンケート結果を踏まえて決定した。多くの回答内容からどのケースであっても子どもの支援と保護者の支援は両輪であり、保護者の気持ちを理解していくことが、子どもの理解・支援へとつながるという認識が強く、重要であると感じていることが明確であった。しかし、どのように保護者にアプローチし、関係を築いていったらよいかが一番難しく、迷いがあることがコーディネーターの共通点であった。そのため、「保護者」をあえて「親」と表記して対象を限定し、講義とワークの形式で行った。

講義の中で、保育者が親に子どもの気になっている様子を伝えても家庭での様子と園での様子が違い、支援の必要な場面を伝えきれないという「両者に相違」があることを知り、改めて学び直すこととなった。親としての自信をなくしているケースでは、子育ての意欲が持てるまで支援をしていくことなど、親自身の気持ちにどう寄り添っていかれるか改めて考える機会となった。次年度も講師には継続して発達の観点、関わ

り方の工夫等をご指導いただき、指定園として他園に指導ができる力を身に付けていきたい。

③危機管理

●職員の危機管理意識の向上

ヒヤリハット月間を実施。この取り組みは、ヒヤリハットの重要性を再認識するために毎年設けている。これにより書式等の改善を含め、リスクマネジメントの共有とその重要性を定着させることができた。各園ともに職員配置などのヒューマンエラーが多かったが、分析では物的環境や計画等のカテゴリーでの原因もあり、一人ひとりの職員が、事故分析力、事故全体を評価する力を身につける課題に対して取り組んできた。

中でもプール・水遊びではガイドライン（＊）に則って「監視者の役割」をテーマに研修を行い対策を徹底できた。

午睡中の呼吸チェックや姿勢については、SIDS（乳幼児突然死症候群）の死亡原因の中にうつぶせ寝があり、0,1 歳児は 5 分おきの呼吸確認と確認方法の指導を徹底して行った。2 歳児以上幼児クラスであっても、入眠後の室内はレースカーテンのみとして、子どもの寝顔（顔色）がわかる状況を作り、仰向けの姿勢を促している。

＊ガイドラインとは「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」(内閣府・文科科学省・厚生労働省より)

園内研修「危機管理」の様子

写真は危機管理の研修として、実際に保育の様子を撮った写真の中から危険個所、危険行為を洗い出す研修を行った際のものである。写真で共有する時間は、危機管理意識の向上につながった。

●事故報告

事故：受診、厨房提供ミス、テラスからの落下物（ピノ）、連絡帳の入れ間違い等

認定こども園モモ：７件
認定こども園ピノ：19 件
保育園ナナ　　：１件

市・国への報告に値する重大事故

認定こども園モモ：０件
認定こども園ピノ：０件
保育園ナナ　　：０件

●防災・安全管理

災害、誤食、防犯等様々な訓練の実施、また「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」の周知、及び園内研修やマニュアルの整備を行った。６月にはプール事故に関する研修『繰り返されるプール事故から子どもを守る』に参加し、園ごとに事故の事例を客観的に分析し、普段と違うことが起こった時に事故が発生している点を再確認し、日頃からマニュアルの徹底、予防の取り組みを積み重ねていくことで事故予防につながっていることが認識できた。

プール監視役

※安全対策としてプール遊びには１名の監視役を立て、監視体制の空白が生じないよう徹底。

交通安全教室・防犯教室（園児）の様子

●防災連携園の取り組み

（古淵保育園、認定こども園モモ、認定こども園ピノ、保育園ナナ、古淵あおば保育園、分園バンビーノ）

防災連携園会議を毎月実施、年長児の交流会は年３回実施し、その中で今年度は地震を想定した訓練に重点をおき行った。引き取り訓練後には古淵・モモ・ピノの３園の職員が合同で避難訓練と研修を行った。研修では、日頃より大規模災害時に備え、３ 園の職員が互いに連携できること、大規模災害時には何が必要か等を話し合い、「連携園とは？」「災害時乳幼児支援ステーション（＊）とは？」等クイズ形式をとるなど職員に内容が周知されるよう工夫を凝らした。

２月には幼児クラスを中心に３園合同で古淵鵜野森公園に避難する訓練も実施した。年度の途中から古淵あおば保育園、分園バンビーノ、保育園ナナも連携園に加わった中で、今後もセンター園である古淵保育園と共に取り組んでいく。

＊ステーションは災害時における避難場所としての位置づけではなく、一時的な育児支援の場として災害発生後３日後を目処に開設・運営するものであり、センターステーションとなった園は保育課との連絡調整をする役割等がある。

防災連携園　職員合同訓練の様子

●保育園ナナ　複合施設合同避難訓練(年間２回)

オリーブナナ・セブンイレブン・保育園ナナの３施設での水消火器訓練。防火管理者である理事長より、水消火器の使用方法を指導。

●立ち入り検査、訓練、施設管理、点検

・消防立ち入り検査　実施無
・厨房衛生監視　実施無
・防災連携園合同訓練　９月実施
・施設自主点検　12回実施
・自主定期検査　７月３月実施
・消防設備点検　５月11月実施
・衛生害虫防除　３回実施
・危機管理研修　心肺蘇生法（５月)、プール監視役（７月)、感染症対策（10月）

実施月		参加者	訓練	内容
５月	全体会議	職員	防犯訓練①（共通） 応急処置訓練	防犯講習訓練 心肺蘇生、救急法 エピペン
	日中	保護者	災害時伝達訓練	14時～保護者・職員
	日中	職員	通報訓練	消防署への通報
５月 ６月	懇談会	保護者	防犯訓練（ピノ・ナナ）	園の取り組み理解 防犯意識
７月	日中	職員	安全管理訓練	プール・水遊びについて
８月	全体会	職員	アレルギー訓練	災害時のアレルギー児対応
９月	日中	保護者	引き取り訓練 消火器訓練（モモ）	保護者・園児・職員 水消火器を使用した実践
10月	日中	職員	感染症対応訓練	嘔吐下痢の対処法
10月 11月	日中	職員・園児	消火器訓練（ピノ・ナナ）	水消火器を使用した実践
11月	全体会議	職員	防犯訓練②（共通）	実践訓練
１２月	日中	職員	通報訓練（ピノ）	消防署への通報
３月	全体会議	職員	緊急時対応訓練	緊急時対応（アレルギー・事故）
毎月	年間	園児・職員	避難訓練・初期消火訓練	
隔月	年間	職員	避難持ち出し点検　（モモ・ナナ：年５回）	

●ナナの園児の確保

0 歳児クラスに入所希望者が少なく、4 月は定員割れのスタートとなった。園見学や一時保育利用の問い合せの際に、子育て広場や法人行事(カシオペア祭 20 周年)、園の教育保育内容を紹介。またホームページや近隣の子どもセンターへお誘いなどの掲示、自治会行事への参加等、地域の方への発信も続けてきた。

近隣に新園や小規模保育園が増えたこともあるが、次年度の重点課題として「選ばれる園づくり」に取り組んでいく。小規模であるということもあり、地域に周知されておらず、今後の発信力を高め地域への取り組みを実践していく。

④人材確保・育成

●人材確保

保育士不足が深刻化している中で養成校訪問や関係機関との連携など計画的な採用活動により、十分な職員数を確保できたと言える。

「ふれあい体験」の受け入れ園としてモモは H28 年度実績 21 名、H29 年度実績 10 名 H30 年度実績 35 名と増加し、ピノは 29 名、H30 年度はナナも受け入れ園に加わり H30 年度 18 名と養成校からの受け入れが増えた。この「ふれあい体験」は教育実習とは違い、学生が気軽に園に足を運び、園の雰囲気、教育保育内容、職員の様子などを知ることができるため、学生にとって利用しやすい点に加え、保育の魅力を実感できる機会でもある。今後も積極的に受け入れをしていきたい。「ふれあい体験」から保育実習そして採用に繋がるケースもあり、今後も様々な機会への参加や養成校との連携を図っていく。

●キャリアパス制度

H29 年厚生労働省が定めた保育士等キャリアアップ研修とガイドラインを、園のキャリアアップ制度にも反映させた。職員自身がキャリアを描きやすいよう研修手帳を作成した。

●職場環境改善プロジェクトの実施

勤務時間内に業務が行われるよう、休憩時間や事務時間など具体的な改善案を出し合い実施。今後も継続していく。

4．苦情要望

毎月の苦情開示：園内掲示・ホームページトピックスで実施

認定こども園モモ	30 年度の苦情 0 件
認定こども園ピノ	30 年度の苦情 0 件
保育園ナナ	30 年度の苦情 0 件

5. 子育て支援事業

①子育て広場『ひだまり』

モモ

情報提供	ホームページ、ポスター、チラシ
貸出図書	実施　※1
子育てに関する講座	10 回/延べ 168 名参加（年間）
子育て家庭の交流	18 回/延べ 104 名参加（年間）
園庭開放	15 人／年　※2
相談及び指導	来園相談・2 件（主に入所に関係） 電話相談・111 件　計 113 件

※1　現代のニーズに合わず、利用者がほとんどない状態であったため昨年 3 月より廃止とした。

※2　今年度より、予約なしで遊べる場の提供を開始した。
人数は 15 名と少ないが、予約なしを PR して次年度も気軽に園に足を運んでもらえるように取り組み、育児相談や入所へとつなげていきたい　。

講座『発達体操』

日常の抱っこの仕方やオムツ替えの時の関わり方など子どもの発達を促す動きを体験できるため、毎年好評を得ている講座となっている。子育て広場「発達体操」で行っている乳幼児の発達を促す動きについては、広場とは別日に、実技と講義の２部形式で職員も学ぶ機会を受けた。

子育て広場「発達体操」の様子

「乳幼児の発達」職員研修の様子

ピノ

情報提供	ホームページ、ポスター、チラシ
貸出図書	実施
子育てに関する講座	３回/延べ 62 名参加
子育て家庭の交流	17 回/延べ 140 名参加（年間）
相談及び指導	来園相談・89 件（主に入所関係） 電話相談・０件　計 89 件

ピノでも「発達体操」「ベビーマッサージ」の講座を開催し、参加者にとても好評であった。昨年度に比べて講座参加者、交流参加者共に増加しており、引き続き、地域の親子への開催情報の発信、来園しやすい広場づくりを通して子育て相談等の支援につなげていく。

ピノの子育て広場の様子

6. 研修（園外研修、園内研修、園外自主研修）

昨年度から、相模原市内の保育者の資質向上を図る市独自の相模原市保育者ステップアップ研修が実施された。一般研修と専門研修(キャリアアップ研修)があり、年間を通して、経験年数や能力に合った研修を計画的に受講することができた。全体会議の場で研修報告を行い、自らが学んだことを文章化、言語化し伝える力を身につける機会を設けた。また、園内研修者となる人材も増え、主体的に学びを深めることに繋がった。

年間で ４ 回開催される全体会議では、３ 園合同研修や、各園での取り組み報告や課題の抽出を実施した。

昨年同様、年に２回開催される合同保育研修会（＊）では、今回ピノの保育教諭が教育・保育実践の発表を行った。生活や遊びの中での体験を通して自園の取りくみを語る研修であり、H27 年度より参加しているが、他園の保育の発表を聞き、知識や技術のみならず保育の楽しさや、やりがいを改めて感じ、共感し合える仲間がいることで良き交流の場となっている。

＊昨年度：８月と１月の開催。神奈川県内のこども園・保育園・幼稚園が 12 園（約 80 名）参加し、保育の実践発表をする。他園の取り組みや保育に対する考えや思いを学べる貴重な機会である。今年度は、８月と１月に予定されている。

研修（モモ）

●園内研修

職員同士学びあえるよう職員が研修者となる機会を作っている。今年は「子ども理解」と題し常勤、非常勤を問わず子ども一人を取り上げて、その子について付箋やホワイトボードを使ってワークを行った。この方法は、日頃から子どもや保護者に関わる情報を共有したい、育ちを共感したいという職員の要望もあり、また、伝達方法として「時間がない」という点が多く聞かれていたため、研修として実施し、各自の思いや考えを可視化できるよう工夫した。一人の子どものことを徹底して話し合うことは、伝達事項を「読んで共有」するより、実際に参加者同士が付箋やホワイトボードを使用し思いや考えを可視化することで、その場で共有しあえる有効な手段であると参加者より好評を得た。

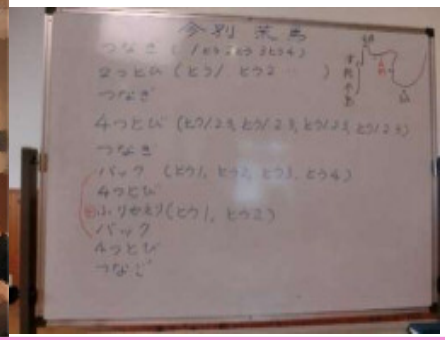
またこの手法は限られた時間を有効に活用できると実感できた内容であったため、次年度も継続して行いたい。

園内研修の様子

●荒馬（民舞）

職員間で教え合い、練習に励んだ。

カシオペア祭、運動遊び等、様々な場面で、太鼓や笛のお囃子に合わせて踊りその場を盛り上げている。職員が主体的に学ぶ姿勢が子どもの良き手本となるよう、引き続き職員間でも荒馬を伝承していきたい。



カシオペア祭で荒馬を披露した様子

●園外研修

相模原市の「中堅研修」を主幹保育教諭が受講し、その取り組みとして自園が「公開保育　実施園」となった。市内の保育園・こども園だけでなく、世田谷区保育課の参加があり、総勢７０名の方が来園した。

法人内で協力を得られ、老人ホームデイサービスの場所を保育参観後の協議・講義会場とした。この研修は「自園の良さや課題に気付く」ことを公開保育という参観を使って、「中堅研修」受講者自身がファシリテーターとして園内研修推進者を目指すものである。次年度も新たな受講者を任命し、引き続き園内の人材育成の中心的役割を担える職員の育成に努めたい。

公開保育　参観の様子

公開保育　参観後の協議の様子

研修(ナナ)

●園内研修

小規模である保育園ナナは、ワンフロアという構造上、感染症の拡大防止が重要課題である。春と秋に１回ずつ感染症研修を行い、嘔吐物の処理を様々な時間帯と場所を用いて全職員が実践研修を行った。実践型の研修を行ったことで、感染症キットの場所や処理の仕方がより理解できる機会となった。また、感染症が流行る時期以外においても、換気・湿度・清掃など衛生管理に対しての意識が高まった。

●自主勉強会

自園で扱っている羊毛や毛糸に触れ、手仕事をする時間を多く持つことで、季節を表す「季節のテーブル」を日頃から整えるよう心掛けるなど室内の環境作りへの意識が高まった。

職員が主体となって取り組む自主勉強会を通して、自ら学ぶ姿勢を持ち保育の中で実践することへと繋がっている。

研修(ピノ)

●園内研修

危機管理研修として、保育中に見かける身近な光景が事故に結びつく危険性があることを認識するため、園内の様々な時間に各保育室の様子を写真におさめ、研修資料を作成した。3～4 名ずつに分かれグループ討議をしていく中で、気にかけなければいけないことを意識はしているものの、事故は一瞬で起きしまう恐れがあること、互いに声を掛け合うような組

研修で用いた写真の一例

織作りをしていくことを再確認し、事故予防に取り組んだ。感染症予防では、園外研修を受けた者が研修者となり、ヨーグルトと新聞紙で嘔吐物を作成し、感染症予防のための実践研修を行うことで職員が適切な処理方法を身につけ、感染症拡大防止の効果を上げた。

●研修内容の共有

園内外の研修で得た知識や情報を、園の改善に活かし、職員間で共有することが大切である。

自主勉強会の摂食研修では、職員同士で乳児の食事援助の仕方を学んだ。例えばお茶を飲む際の援助の仕方によって子どもがどの様に感じるかなど、子どもの目線になって考え、実体験をすることで適切な援助の仕方を再認識し、職員間で共有した。また、手仕事をテーマにした研修では、素材に触れ「手作りのあたたかさ、命を感じられる環境づくり」など、園で大切にしていることを経験から学ぶ機会となった。

外部研修では、時代の流れと共に必需品となったスマホが子どもに与える危険性や、アレルギーとぜんそくなどの専門知識、「保育施設における重大事故を防ぐために」などの危機管理研修に積極的に参加し、受講者は全体会議で研修報告することで職員間の意識を高めていった。研修で得た最新情報や専門知識をもとに、今後はおたよりや懇談会の機会を通じて保護者へも積極的に発信することで、家庭とのさらなる連携につなげていきたい。

認定こども園モモ

園内研修	40 回　328 人　参加/年
園外研修	139 人参加/年
園内自主研修（勉強会）	244 人参加/年

（延べ人数）

認定こども園ピノ

園内研修	33 回　345 人参加/年
園外研修	93 人参加/年
園内自主研修（勉強会）	354 人参加/年

（延べ人数）

保育園ナナ

園内研修	28 回　138 人　参加/年
園外研修	46 人参加/年
園内自主研修（勉強会）	138 人参加/年

（延べ人数）